

2017年1月13日 第3184回例会

於： 横須賀商工会議所



<点鐘・開会> 12:30 谷 会長

<斉 唱> 「手に手つないで」

<ゲスト紹介> *認定特定非営利活動法人アンガージュマン・よこすか理事長

島 田 徳 隆 様
*公益社団法人横須賀青年会議所 理事長 竹 永 久 志 様
副理事長 大 黒 健 司 様
" 門 井 秀 孝 様
" 池 野 啓 介 様
専務理事 中 本 剛 央 様

<会 長 報 告> *ガバナー事務所より
・下半期 人頭分担金送金依頼について

<委員長報告> *雑誌委員会瀬戸委員長よりロータリーの友1月号

<幹 事 報 告> *ガバナー月信 No. 7

*例会終了後第7回理事役員会開催 (302研修室)

<出 席 報 告> *出席委員会 澤田委員長より1月13日の出席率

会 員 数	出席対象者数	出 席 数	欠 席 数	メイクアップ数	出 席 率
112名	93名	55名	38名	3名	61.70%

<ニコニコ報告>

- ・三 役 NPO法人アンガージュマンよこすか理事長島田徳隆様、本日卓話宜しくお願ひいたします。
- ・植 田、福 西、新倉 侖、長 坂、藤 村 各会員 NPO法人アンガージュマンよこすか理事長島田徳隆様心に残るお話し、楽しみにしております。
- ・三 役 公益社団法人横須賀青年会議所 理事長竹永久志様はじめ役員の皆様ようこそ横須賀RCへ。当クラブには皆様のOBが沢山いらっしゃいます。御卒業後は、是非御入会ください。
- ・八 卷、吉田 備、岡 田、新倉 侖、飯 塚、野 坂、鈴木 颯、上 林、長 尾、宮 島 各会員 横須賀青年会議所の皆様、ようこそ！今年も宜しくお願ひします。
- ・飯 塚、齋藤 侑 両会員 誕生月祝いととして
- ・加藤 備 会員 週末は寒波の影響で雪がちらつくかもしれません。皆様風邪に気を付けて下さい。
- ・勝 間 会員 急用のため中座します。
- ・丸 山 会員 何となく
- ・山 下、物 井、勝 見、軍 司、小林 (-)、植 田、瀬 戸、山 ・、澤 田、秋 本、齋藤 眞 各会員 事務局三宅様、体調回復お祝ひ申し上げます。残り半年宜しくお願ひいたします。
- ・福 西 会員 谷会長より写真をいただいて

<卓 話> 「自分らしい生き方を手に入れる場所」

認定特定非営利活動法人アンガージュマン・よこすか
理事長 島 田 徳 隆 様

「認定特定非営利活動法人アンガージュマン・よこすか」の理事長を務めます島田徳隆です。“自分らしい生き方を手に入れる場所”、ということで私たちの活動紹介と横須賀市における、子供たち、若者たちの課題、現状についてそして、それに対する必要な取り組みの3点についてお話しさせていただきます。

私は、鴨居で育ち、高校卒業まで横須賀にいました。大学は山梨県にある都留大学に行きました。大学は教員になる学生が多かったのですが、私はちょっとひねくれていましたので教師にはなりたくない、と想い、横須賀に戻ってから、「教員ではない職業で、民間人として出来ることがないだろうか」と模索していました。丁度その頃、横須賀に「アンガージュマン」ができ、そこでボランティア活動に関わったのがきっかけで今に至っています。

最近、子供たちの貧困や虐待といった課題が山積しています。そして残念ながら、横須賀は不登校率の高い地域である、ということが遅ればせながら判ってきました。また、これは全国的にも言えることですが「不登校には、理由は無い、原因が判らない」というのが現状です。様々な複合的な理由で、結果として学校に通えなくなるのではないかと、捉えています。よく言われるのは、いじめであるとか、先生とうまくいかない、友達とのトラブル等ありますが、それはあくまでも複合的な理由のひとつでしかなく、いじめの対策を取れば不登校は減るかというところという訳ではないと考えます。私個人の印象としては、思春期、あるいは青春期の悩みであるとか苦しみが、人によっては多すぎてしまうのかな、と思っています。その時に、私たち大人が適切な関わり方や対応を取り、不登校になった場合には、子供に寄り添って見守ってあげればいいのか、と思っています。また、人との関わりが出来ない場合には人間関係がうまく作れるような、環境を私たちが用意してやらなければいけないと思います。



アンガージュマンは1998年に横須賀市の教育委員会がやっている適用指導教室という、不登校の子供たちの居場所となり、現在は学校へ復帰するための拠点になっています。そこに集まる親御さんたちが、学校に通っていないけれども、「将来は、進路は、どうすべきか？」ということで、不登校相談会というものを始めて、年に一回ポジティブなメッセージを発信することを始めました。

現在は神奈川県教育委員会が主催をして県内の7地域で同様の取り組みを始め、ちょうど10年目になります。日本全国の通信制高校や私立高校などに、アンケート調査を行い、不登校経験の子供たちがその後どのように活動しているのか、あるいは、サポートをするプログラムがあるのかを調査し、不登校相談会に参加した親御さん、子供たちに提供する機会を作ってきました。

こうした取り組みは、現在私たちアンガージュマンが主催するのではなく、県にバトンタッチすることが出来ました。この取り組みには、文部科学省も注目していて、行政や学校だけで取り組むのではなく、官民共同で考えていかなければならないのでは、という姿勢が芽生えています。未だ国の施策としての反映はできていませんが、我々が行ってきた横須賀、神奈川発祥の取り組みが少しでも全国に広がればよいと思っています。私たちは今お話しした①相談・カウンセリングと併せ②フリースペース事業③学習サポート事業④就労支援事業と4つのプログラムを軸に子供たちの社会参加を目指しています。

フリースペース事業は「不登校の子供たちが安心して過ごせる場所」をコンセプトに施設を作っています。極端な例では半年間、ずっとこのソファで寝ていた子供もいました。「一日中寝ていて楽しいことがあるのだろうか」と僕らスタッフは思っていたのですが、彼にはその時間が必要だった事が判りました。半年間眠って、また学校に戻り、現在は大学生になって頑張っています。人によってこれは半年、1年、3年なのか判りませんが、基本的には、疲れ果てている子供がここに来て、エネルギーを充電し、ここからまた新しい社会に出ていくということが可能であることを私たちは知りました。

学習支援事業は90分、一対一で学習をやっています。不登校の子供たちは好んで学校に行かないわけではなく、本当は学校に戻りたい、行きたいという子が殆どです。私個人としては、無理して勉強しなくても、やる気になってから勉強した方がいいんじゃないかと思っていますが、学校に行っていないことによって、勉強に対する不安があったりするので、フリースペースだけではなく学習の支援も行っていかなければならないと考えます。また、私たちが心がけていることは「人と人とのコミュニケーションをここで身に付けて欲しい、あるいはここで友達を知る機会を作って欲しい」と考えています。講師の先生方は大学生から元教員OB、教えた経験のない主婦の方にも来てもらっています。力を貸して下さる皆さんには一番大切にしてほしいのは、「生徒さんとのコミュニケーションです」とお伝えています。

6年前からは、生活保護のご家庭のお子さんたちも受け入れています。その理由の一番は、お金がないという経済的な事より、孤立していつたり、困っていたりしているからです。“貧困”の「こん」は困っているという字です。困っているということ、なかなか人には言いたくない、助けを求められない、周囲とのつながりやネットワークが全く無い。その結果、家族が孤立し、子供たちが孤立してしまう、ということが問題の本質であると考えます。周囲や社会との接点として「アンガージュマンがある」という取り組みを考えています。正直な話、僕らが関わろうとしてもそれを拒絶されてしまうケースが非常に多く、困難な活動ですが、今後も一生懸命取り組んでいかなければならないと思っています。

就業支援は、2006年に「はるかぜ書店」を立ち上げ、いわゆる「引きこもり」の当事者、経験者が書店を運営するというコンセプトで、今年で11年目になります。本格的な就業前に地域商店街の仕事を請負ながら、地域の皆様に支えられ事業を行っています。その取り組みが評価され、2010年に内閣府の大臣表彰を受けることが出来ました。

私たちのような小さな地道な活動は、他人から評価されることは多くは有りませんが、「現在求められている活動というのは地域に根差した取り組みなのかな」と思っています。「上町という地域の力があって、皆さんの力を借りながら活動をしていくと子供たちも若者たちも成長していく。そして同時に私たちの団体も成長していく」と思っています。はるかぜ書店は現在2名の若者が業務に携わっています。

不登校というのは何なのか、簡単に説明しておきたいと思います。文部科学省の定義では、30日以上に渡る長期欠席の小中学生の中で、経済的な理由や病気ではなく、ほかの理由で欠席している子供たちのことを言っています。横須賀市は今、554人の不登校児童生徒がいます。内訳は、小学生111名と、中学生443名です。これは全国平均のおよそ1.5倍に当たります。極めて高い水準であると考えていただければと思います。横須賀市で何故不登校者が多いか、ということは判りませんが、人数の問題よりも、行政や私たち民間のサポートがどういう結果であるのかが問題であると思っています。私たちも、行政も、不登校を減らすというよりは、孤立している子供達をサポートしてあげられる体制を先ず作っていかなければならないと思っています。

「引きこもり」については、6か月以上、家庭の中から外に出ていないとか、仕事とか関わりをしていない人たちのことを「引きこもり」と言い、年齢でいうと、15歳以上40歳未満という定義を厚生労働省は謳っています。子供たちと一緒に、当事者やその家族が孤立をしているという状況が問題の本質であると思っています。「社会に出ようとした時に一歩が踏み出せない」そのような状況で無理にバイトをすれば仕事をするということよりも、「その前に準備をして社会に慣れていく」ということが必要であると考えます。フリースペースであるとか、はるか書店での経験をステップにして、アルバイトにチャレンジすると、割とスムーズにいくのではと思っています。現在、国の取り組みにも、中間的就労という言葉が出始めて、いわゆる就労するための体験だったり、準備を整えて皆さんで取り組んでいくという流れになりつつ有るような気がしています。不登校に比べて、若者支援をしている団体はきわめて少なく、民間でのサポートも十分ではないと思っています。横須賀市の場合も、民間と一緒に取組んでいく方向になれば良いなど考えてはいますが、なかなかうまくいっていないのが現状です。

「引きこもり」の人数は、正確には把握されていないのが現状であり、これが一番の問題ではないのかと思っています。内閣府が昨年、調査を行った結果、全国で54,000人とされています。これは5,000人を対象に調査して、その割合から導き出したもので十分と言えるデータではないのではと思っています。きちんと

調査をしているのは全国でも限られた自治体だけで、東京の町田市の調査では大体、15歳から39歳までの、約5.5%が「引きこもり」にある、という結果が出ました。これを、横須賀市に当てはめると約6,000人になります。私たちの活動もまだまだ、大きな課題が残されているので、頑張っていかなければと思っています。

私たちの就業支援事業は、たまたま商店街の空き店舗を借りて運営を始めたので、上町商盛会、つまり地域との関わりが深いということが最初からありました。こうした取り組みは、全国的に見ても、そう多くはないので、上町でのこうした地域に根差した活動が、全国に向け大きな広がりになっていくという事ができればと考えています。具体的には商店街のイベントの運営であるとか、日常でいうと看板灯が切れたら交換をするとか、若者、子供達と一緒に参加し、互いにウインウインの関係でやっていく。そこでは、私たちも理念をひけらかさないで、話し合いながら同じ目的に進んでいくという発想が大切なのではと考えています。そして、その先の段階では、社会資源の利用が必要です。私たちの団体で子供達や若者のすべてを支援することは無理です。雇用や福祉関連の関係機関と連携をして、適切なサポートを受けられる場所を紹介するという事にも取り組んでいます。皆さんの知恵や経験、制度をうまく利用して一人一人の子供たちをサポートしていく発想が必要ではないかと思います。神奈川県教育委員会と神奈川県学校フリースクール連携協議会を作って、学校とフリースクールが連携をして行う不登校支援を10年間模索してきました。この協議会は、全国でも神奈川県にしかありません。連携という発想が行政側、あるいはフリースクール側にない、というのが全国的な現状だと考えます。文部科学省は注目しているものの、実際には文科省内部でも様々な課題があるようです。一人の子供をサポートしていくためには、官民合わせてサポートしていかなければならないのではと考えています。

また、子供だけではなく若者についても、生活困窮者のサポートをして欲しい、と言われていて、横須賀市と一緒に取り組んでいます。現在、私たちの卒業生を受け入れてくださる事業所さんもあり、こういった方々に協力を働きかけながら自立に向けて取り組んで行こうと考えています。

最後になりましたが、先月、ここに通っていた子どものお母さんから手紙をいただいたので、紹介させていただき、話の締めくくりとします。小学生の、太郎君と仮にしておきます。

「アンガージュマンのみなさまへ。いつも太郎がお世話になり、ありがとうございます。1月10日から福井県の私立小学校に通う事になりました。週末と夏休み、冬休みは帰ってきます。太郎は毎日アンガージュマンでの出来事を生き活きと話してくれます。いつも登場する方々は私にとってもすっかり馴染みで、私も毎日会っているような気がするところです。アンガージュマンで肯定的に受け止めてもらえたこと、ずっと安心できる、無理をしなくていい場所をもらえたことは、太郎にとって本当に救いだったろうと思います。毎日笑顔で帰ってくる彼を見て私もほっとしましたし、とてもうれしかったです。本当にこの数か月ありがとうございました。次は3月の春休みにお世話になります。また、近くなりましたら、連絡します。これからもよろしくお願いします。太郎の母」。

以上です、ご清聴ありがとうございました。

<閉会・点鐘> 13:30 谷 会長

週報担当 松村和雄